

玉屋（おどけ俄煮珠取・おどけにわかしゃぼんのたまとり）

へサアサ寄ったり見たり 吹いたり評判の玉や／＼ 商う品は八百八町 毎日ひにちお手遊び 子供衆寄せて辻々で お目に掛値のない代物を お求めなされと辿り来る

（へサア／＼評判／＼ お子さま方のお慰み 何でもかでも

吹き分けてご覧に入れましょう 先ず玉の ヤ始まりは）

へ今度仕出しじゃなければもお子様方のおなぐさみ ご存じ知られた玉薬 鉄砲玉とはこと変わり 当たって怪我のないお土産でへ曲は様々大玉小玉 吹き分けはその日／＼の風次第 まず玉尽くして言おうならへたま／＼来れば人の客 などとじらせば口真似の こだまもいつか呼子鳥 たつきも知らぬ肝玉もへしまる時にはそろばん玉の 堅いおやじに輪をかけて 若いうちから数珠の玉 オットとまった性根玉 しゃんとそこらでとまらんせへとまるついでにわざぐれの蝶々とまれをやつてくりよ

へ蝶々とまれや菜の葉にとまれ菜の葉いやなら葎の先へとまれそれとまった 葎がいやなら木にとまれ

へつい染み易き廓の水へもし花魁へおいらんと 言ったばかりで後先は恋の暗闇辻行燈の陰で一夜は立ち明かしへ格子のもとへも幾度か 遊ばれるのは初めからへ心で承知しながらも もしやと思うこけ未練 昼の稼ぎも上の空

へ鼻の先なる頬かむりへ吹けば飛ぶよな玉屋でも お屋敷さんのお窓下 犬にけつまずいてオヤ馬鹿らしい

へ口説きついでにおどけ節へ伊豆と相模はいよ国向かい 橋を架きよやれ船橋を 橋の上なる六十六部が落っこったへ笈は流るる錫杖は沈む 中の仏がかめ泳ぎへ坊さん忍ぶは闇がよいへ月夜にはあたまがぶらりしやらりと のばサ頭がぶらりしやらりと こちや構やせぬへ衣の袖の綻びも構やせぬ しどもなやへ折も賑う祭礼の花車の木遣りも風につれ へオーエンヤリヨーへいととも畏き御代に住む 江戸の恵みぞありがたき。